

老齢動物の病気について

今号から MR（僧帽弁閉鎖不全症）の治療についてお話しします。実際に MR と診断されるケースは StageB が多いですが、飼い主さんが症状に気がつかずに発症し StageC で診断されることもあります。

まず、StageA は特別な犬種のみで生まれたときから該当します。StageB1 は僧帽弁領域に心雑音を認めるが、検査で MR の基準を満たしていない初期である状態。このふたつの Stage において、**投薬は必要ありません**。ただ、注意したいのは「**MR 以外の疾患がない**」という前提です。

次の StageB2、すなわち心エコー検査・レントゲン検査において MR の心拡大の基準を満たすものの、肺水腫の症状がまだ発現していない状態。次の StageC からは、肺水腫やなんらかの MR の症状があるので、最低限それに対して投薬をするのは理に

なっていると言えます。飼い主さんもその症状を治療してほしいと望んでいます。しかし StageB2 では、症状は軽度の運動不耐性で飼い主さんが気付かないこともあり、犬が苦しんでいる症状はありません。**それでも最新の ACVIM ガイドラインでは、StageB2 以上の MR においてピモベンダンの投与を推奨しています**。StageB2 からピモベンダンを投薬した場合に、心不全発現までの期間を延ばし**延命**にもつながったという複数の文献が根拠です。投薬が大変でなく経済的に問題なければ、投薬を始めることをお勧めします。また、StageB2 では食事制限や過度な運動制限は必要ありません。しかし、人の食事や加工食品など**過度な塩分摂取**があるなら改めるべきです。

MR の悪化要因として、高塩分摂取、フィラリア症、全身性高血圧、慢性腎臓病などが考えられます。MR

② 犬の僧帽弁閉鎖不全症（MR）

6.MRと診断された時、飼い主は何をすべきか？
～ MR の治療について～

文・写真 中西章男
text & photo by Akio Nakanishi



が発症要因となるうっ血性心不全は、全身性高血圧も慢性腎臓病も、アルドステロンというホルモンにより**それぞれを相互に悪化させる傾向**があるので、これらの併発疾患がある場合は**抗アルドステロン作用のある薬物**やその前駆物質である**アンギオテンシン阻害薬**などが処方されます。

StageC にいったんなると、症状が消えても StageC に該当するのですが、飼い主さんの告知、認識不足などから StageB2 と評価されてしまうことが

あります。それでも治療しては StageC に対する治療が推奨されます。StageC は病態も様々で、初発なのに命に関わることもあれば、何回も同じような軽い症状を繰り返すケースもあります。

飼い主として考えることは、薬物治療以前に、運動制限や食事療法の他に、心拍数・呼吸数をなるべく落ち着かせるように動物が安心してリラックスして暮らせる環境を整えてあげることも大切です。(次号に続く)



Profile

獣医師・獣医学博士。1959年生。1986年日本獣医畜産大学（現日本獣医生命科学大学）大学院博士課程卒。大学ではフィラリア症の血行動態、腫瘍および外科の免疫について研究。1987年東京都杉並区で「阿佐谷ペットクリニック」を開院。小動物の総合診療医として犬猫のみならずウサギ、小鳥、ハムスター、モルモットなど数々の動物を診療してきた。趣味：ゴルフ、モータースポーツ、機械いじり、動物たちとの戯れ。著書：『車イスに乗ったチロ』集英社